

## ● シリーズ 私の見た日本 Vol.211

## 私を感じた日本の美意識

龐 曉蕾 (ハン ショウレン)

1996年中国内モンゴル生まれ。2019年中国集寧師範学院美術学部環境デザイン専攻卒業。2020年-2023年成幸日本語学校。現在、静岡文化芸術大学デザイン学部研究生



日本に来ていつの間にか2年半になりました。私にとって独特の文化を持つこの国にずっと憧れていました。大学時代、ネットで見た日本人の作品がとても印象に残っていました。その作品は、視覚に訴えるデザインとは違って見た目はシンプルなのですが、とても意味深く、惹かれるものがありました。そのときから「日本」を意識するようになり、大学卒業後、私は日本語の勉強を始めました。

2020年12月、はじめて日本の土地を踏み歩きました。とてもワクワクし、これからの楽しみにあふれていました。本で読んだ日本ではなく、私は「日本を感じた」のです。日本で勉強しようと思ったきっかけの一つに、ある本との出会いがあります。日本の建築家、磯崎新さんのエッセイ集『建築の解体』です。そこに書かれていたことがとても印象に残っています。それには、「建築は解体されるべきものだ」と書かれていました。

建物とは、いずれ壊さねばならない。しかし、ただ壊すということではなく、どう変化させるか、どう発展させるかということが重要です。私はこの本を読んで、日本の建築について考えました。日本の特徴は、新しいものと古いものがうまく融合している国だとい

うことです。これは、ほかのアジア国に比べると、非常に珍しいと思います。もちろん日本も中国と同じように、古い文化が廃れ消えていっています。しかし、日本は常に文化が消えると同時に、新しいものを生み出し、そして新しい社会へと適応させているということです。また、そのなかで今でも残っている伝統を、日本の職人がどうやって守りながら発展させてきたのか知りたいと思うようになりました。私は思い切って仕事を辞め、日本へ留学することを決心したのです。

私は中国の内モンゴルの小さな町で生まれ、モンゴル民族の文化の影響を受けて育ちました。モンゴル民族の建築は、他の国の建築様式と同様に独自の象徴性があります。私は中学時代、周りの建物がかつてない勢いで発展していったことを覚えています。それは、都市部にモンゴル文化のスタイルを持つ現代的な建物や街並み、景勝地が続々と出現し始めたことです。しかし、人々の心の中には「モンゴルの建築って？」という漠然としたイメージだけで、何かモンゴル風を装っていればそれだけで「モンゴルの建築」という薄いものでした。

時代を経て今、世界的に見て、建築に対す

る考え方は画一的になってきています。モンゴルも例外ではありません。ただただ、ステレオタイプの同質的な「美しい家」を設計することになっています。そこには、「人」そしてそれをとりまく「自然」という概念はありません。しかし重要なことは、家と人、環境との関係を設計することです。そういった流れのなかで、日本式建築の美しさは、装飾よりも全体のバランスと整合性にあると思います。素材そのものの特性を重視し、その特質を強調することで、素材の素朴で純粋な美しさが伺えます。木材には色を塗らず、壁も塗装していません。材料の本性を十分に活かしています。反対に中国やモンゴルでは、鮮やかでまばゆいばかりの色絵、精巧に彫られた装飾品が散りばめられており対照的です。日本建築は日本人の自然美に対する追求を反映していると思います。

私は、この留学中に京都と奈良、2つの歴史的な都市を見学する機会がありました。そのなかで私が意外に感じたのは、伝統的なお寺ではなく、賑やかでありながらも混雑していない京都駅でした。京都駅はいわゆる「人が乗り降りする」という純粋な駅というより、一つの「まち」です。駅の基本機能は全体の約1/20で、残りはホテル、百貨店、劇場、

商店街、広場、空中庭園などです。そこでは様々な人が行き交っています。京都駅以外でも、日本の中心駅はほとんどがそうです。

日本の駅で特徴的だと私が感じるの、高架下の空間利用です。商業施設を空間にうまく入れ込むことで、独特のランドマークとなっており、空間をうまく周辺に溶け込むように無駄なく活かしています。反対に中国では、都市化の急速な発展の下、高架下空間が大量にあるけれども活かされていません。逆に都市を分断し、景観を破壊していると感じます。

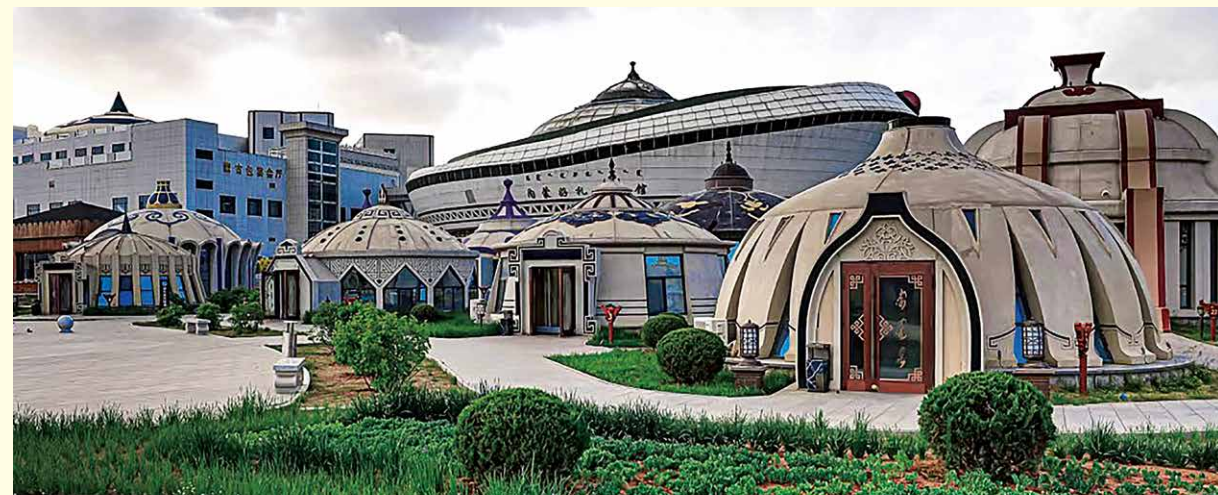
私は日本の高架下の空間利用について調べてみました。すると、日本ですぐに高架下

の開発利用ができたわけではないことがわかりました。戦後からずっと、高架下の空間は露天商と闇市があり雑然とし「ただある」だけでした。そういったなか、各地では様々な取り組みがなされてきました。東京の目黒区を例にとると、目黒駅にはこれまで見落とされてきたスペースがありました。駅を出ると、700mも高架下の空間があり、暗く、ただっ広いだけでした。そこで、「一つの屋根をシェアする」というコンセプトのもと、8年の年月をかけて商店街をつくりました。これまでの暗さを変え、だっ広いだけの空間に人々が集まる場を作ったのです。こうして中目黒高架下に新生活文化圏が誕生したのに続き、日本のほかの場所でも高架下プロジェクトが進んでいます。このように積極的に空間を活か

しているのです。高架下の空間は現代の立体的な都市文明を体現しています。高架下に必要なのは、モノの置き場や駐車場だけではありません。効率性と美化、そして文化の集合する場として機能するべきだと思います。

京都の旅行中、現地のガイドさんが日本の歴史をこのように説明してくれました。「日本は小さな国で、ほかの国の助けはありません。日本がここまで成長できたのは、自強自立の理念があったからです」。戦後の日本は、70年代の中国と似ていますが、新旧の文化に対する考え方は異なります。私は古い文化を大事にしつつ、発展していくという日本の考え方から学び、積極的に私の国のより良い発展と日本との友好のために貢献したいです。

(翻訳：埼玉大学大学院人文社会科学研究所国際日本アジア専攻 博士課程前期 西村卓也)



内モンゴルの民俗園



モンゴル料理店のゲル

京都駅の展望台から望む

内モンゴルの中国語とモンゴル語の看板



京都駅

東京中目黒高架下の建築

東京中目黒高架下の商店街